【実践報告】

表現する者の養成のために

－保育内容「表現」の授業への取り組みから－

大　岩　みちの
本　山　益　子
影　山　捷　司
麓　　洋　介

要　旨　保育内容「表現」の授業方法と授業内容をもとに「保育内容「表現」」の授業のあり方を求めて、表現する者の養成に必要なものが何かを探ったものである。教員がどのように工夫し、どのような意識で授業に向かうのかということが確認され、保育内容「表現」を担当する教員は、計画、連携、授業後の反省を怠ることなく、常に考え工夫する態度が必要であることが再確認された。今年度試みたローテーション方式で数名の教員と出会い、さまざまな表現への感覚や感性にふれることは、学生の保育内容「表現」の捉えに少なからず影響を及ぼしたことは、アンケート結果からも明らかとなった。保育内容の領域はひとつの「窓」あるいは「切り口」であることを認識しつつ、関連教科の積み重ねであることを意識して、学生が「実習」「実践」に臨むことを願う。

1　はじめに

保育者として子どもと出会い、子どもと向かい合うとき、「表現」の受けとめや交わし合いからその関係作りが始まる。そして、子どもの育ちを願って、様々な手段でそれぞれの気持ちや思いを伝え合うことから互いの理解が進み、人間関係が築かれ、日々の保育が織りなされていく。そのような中、保育内容を見る１つの窓口として、保育内容「表現」という領域が幼稚園教育要領、保育所保育指針に位置づけられてから15年以上が経過している。しかしながら、保育者を養成する私達が、果たして現在保育内容「表現」の意味を確実に理解し、養成課程で果たすべき役割を着実に果たしているのだろうか、また、学生は「表現」ということをどのように捉え、実践への意欲や期待をどのように継続していくのだろうかという疑問が浮かび上がった。

保育内容「表現」とは、子どもたちが『感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする』[1] ことを目標としている。まずは、子どもたちが感じたことや考えたことをありのままに表現することができるような環境や保育者のかかわりが求められよう。保育者となる学生が、養成課程でどこまで、何を身につける必要があるのだろうか。

現行の幼稚園教育要領、保育所保育指針が発令される前（1956年発令の幼稚園教育要領）からの経過で、健康の領域で身体表現、音楽リズムの領域で歌やピアノ演奏などによる表現、絵画制作で造形表現というように、多くが何の矛盾も感ずることなく、領域を分断する保育をする時代が続いた。その実情から、養成課程での教育方法が教員の専門領域からの基礎技能の習得に偏るものからのアプローチになっていた。しかし、子どもたちの遊びや活動を総合的に捉えるならば、保育現場に適応するために、養成の段階から「表現」を捉え直さなければならないはずである。とはいえ、専門領域を持つ教員にとって、保育内容「表現」の授業がそれぞれの専門領域

を中心にしたものにならざるを得ないことも、それはそれで大切な「表現」であり、学び方の工夫次第で得るものの大きさが計り知れないとも言える。

普段、学生が生活する姿から、「自己表現がしにくい学生」「自分を閉ざしている学生」などを見ることがある。保育者となる学生が、子どもたちの感じたことや考えたことをありのままに表現することができるような環境を構成し、子どもたちとかかわっていくためには、まず、学生自身が感じたことや考えたことをありのままに表現することが先決である。そして、自分自身が表現することを通して、子どもの表現していることや表現したいことなどを探っていくことが楽しいと感じる学生に育ってほしいと願う。さらに、授業の中で、常に子どもを意識することを忘れずに取り組む姿勢をもつことからも、子どもたちとともにその場や空間、雰囲気などを共有して楽しもうとする保育者になってほしいと願う。

本研究報告では、感じたことや考えたことをありのままに表現する者を育成するための保育内容「表現」の授業方法や授業内容について、これまでのものを見直しながら、子どもたちと表現し合う視点を持ち合わせた学生の育ちを視野に入れて、検討していくものである。（大岩）

表1　授業展開

回数	テーマ	3時間目			4時間目		
		Bティーム			Aティーム		
1	オリエンテーション	授業の方法と内容、及び、保育内容「表現」について概略を説明する。資料として「保育内容「表現」」[2] を抜き刷り印刷したものを配布する。					
2	春	造　形	音　楽	身　体	造　形	音　楽	身　体
3		身　体	造　形	音　楽	身　体	造　形	音　楽
4		音　楽	身　体	造　形	音　楽	身　体	造　形
5	小動物	造　形	音　楽	身　体	造　形	音　楽	身　体
6		身　体	造　形	音　楽	身　体	造　形	音　楽
7		音　楽	身　体	造　形	音　楽	身　体	造　形
8	絵　本	造　形	音　楽	身　体	造　形	音　楽	身　体
9		身　体	造　形	音　楽	身　体	造　形	音　楽
10		音　楽	身　体	造　形	音　楽	身　体	造　形
11	課題1	「保育所実習」において観察・実践した「表現」エピソードとして、子どもの「表現」の様子と考察についてまとめる。					
12	グループ討議	「課題1」について、グループ内で報告する。その後、「保育の中の「表現」で大切だと思うこと」（「課題2」）について討論し各自がまとめる。「課題1」を提出する。					
13	グループ討議の発表とまとめ	グループの代表者が「課題2」について、グループでの討論について発表する。発表とまとめ各担当者からのまとめと「課題2」を提出する。					
14 15	リズム遊び（補　講）	「手遊び・ふれあい遊び・よく知っている歌を歌っての遊び」を紹介し、からだでの関わりながら実践した。					

2　研究の方法

(1)　授業の実際

①　授業対象　本学幼児教育学科2年生（前期1単位）：アンケート回答者/受講者

Aティーム　126名/142名

Bティーム　130名/136名

Aティームの構成：A、D、Lクラス

Bティームの構成：B、C、Kクラス

②　授業担当者

音楽表現　Aティーム：大岩みちの

Bティーム：麓　　洋介

造形表現　影山捷二

身体表現　本山益子

③　授業の展開

本学において、保育内容「表現」が1単位必修になって以来、「音楽表現」「造形表現」「身体表現」を専門とする教員が、それぞれの専門領域を切り口にして「表現」にアプローチしてきた。そして、学

表２　担当者別の授業内容

	音楽表現		造形表現	身体表現
	Ｂティーム	Ａティーム		
春	春の歌をジェスチャーで表現、曲当てゲーム。言葉のリズムと手遊び。様々な楽器の説明と音の鳴らし方の解説。全員での合唱。	テーマに対して５～６人までのグループでテーマをイメージした曲目を選択し、演奏方法や使用する楽器・リズムなどの編成・構成を考えてグループで発表し、担当教員が中心になってほぼ全員でコメントを出し合い、保育現場での保育内容の捉えにつながるように進めた。 授業の前に、各回・クラスごとに発表する内容について提出してもらい、プログラムを作成した。	「春を見つけ春の絵を描こう」 オリエンテーション時に、「各自が春を見つけ、どう絵に描くか考えてくるように」指示。各自が表現するための描画材料を用意し、四つ切画用紙に自由表現する。	８グループに分れ「春」のイメージを出し合い、「春」をテーマに身体表現の発表をする。（使用曲：「春萌え～せせらぎの清浄～」） 特定のグループと見せ合いをし、「ほめる」観点で感想を言い合う。
小動物	手作り楽器製作。鳴らし方による音色の違いとイメージ（感情）の変化。言葉→音、音→言葉の表現。音による会話。「足音」として様々な動物をモチーフに展開。動物の大きさ、距離感、感情等を様々な音の出し方で表現。「ほたるこい」カノンの合唱。「バスごっこ」合奏。		「小動物を作ろう」 各自、小動物をひとつ決め、それを造形表現する。そのための材料・道具は各自が用意する。	５人グループで、５種類の「たまごから産まれるもの」を、①どんなたまご②どうやって産まれる③生まれてから何をするという観点で深め身体表現をする。百科事典も活用しイメージを確認し、４人を子どもに見立て、保育者としての言葉かけに挑戦する。
絵本	絵本「あまだれピアノぼうし」を使い、絵本の読み聞かせと登場人物（虫）の感情、情景描写などを「音」で表現。 （麓）	（大岩）	「創作絵本を作ろう」 各自、絵本作りのテーマを決め、下書き用の紙を用意して授業に参加。下書き終了後、制作する。 （影山）	事前に「身体表現遊び」の実践を前提として絵本を１冊選び、簡単な「展開案」を作成する。当日、数人のグループになり、選んだ本の読み聞かせをした後、希望者が「展開案」の実践に挑戦する。（本山）

生にはシラバスを手がかりにいずれかを選択させる方法をとっていた。しかし、選択者数と授業内容に偏りが見られることから、今年度、以前に模索していた「並列的な合科授業の経験を踏まえた形の、ローテーション方式をとることにした。つまり、「音楽表現」「造形表現」「身体表現」を偏ることなく経験し、共通のテーマを設定することを通じて、分断することなく、学生の中でひとつの「表現」として消化統合されると考えたからである。具体的な授業展開は、表１に示したとおりである。また、当然のことながら、子どもの「表現」に帰結させるために、オリエンテーションでの講義や、課題１・課題２などによるまとめを設定した。

(2)　担当者の振り返り

各担当者も学生と同じアンケートに回答すると共に、各自の授業の内容と方法についての振り返りレポートを作成し検討した。

(3)　アンケートによる検討

今回の試みを「授業方法」と「授業内容」から検討するために、13回目の授業が終了した時点でアンケートを実施した。

【質問項目】

①　開講時期
②　授業期間
③　授業方法（ローテーション方式）
④　授業内容（春・小動物・絵本というテーマ）
⑤　各担当者の授業（音楽表現）
⑥　各担当者の授業（造形表現）
⑦　各担当者の授業（身体表現）

なお、③から⑦の項目については５段階尺度で質問紙を作成したが、①②については具体的な選択肢を設けた。そして、各項目、自由記述欄を設け感想の記述を求めた。この感想については、質的な資料として考察の中で用いることにした。　（本山）

3　結果と考察

(1)　担当者別の授業内容と振り返り

各担当者が提出したレポートから、「春」「小動物」「絵本」という３つのテーマでの実際の授業内容に

ついては、表2のようにまとめることができた。各自、新たな試みではあり、各クラスわずか3回ずつの講義しかもてないという状況にもかかわらず、テーマからそれることなく、また、専門領域を生かしてアプローチしていることがわかる。そこで、各自のレポートから個別に授業について抽出し振り返ってみたい。なお、レポートは自由形式であったので観点・内容・分量など様々である。

① 音楽表現（Aティーム）　（大岩）

「授業内容・展開方法について」

・テーマに対して5～6人のグループでテーマをイメージした曲目を選択し、演奏方法や使用する楽器の編成、リズムの構成を考えてグループで発表し合った。担当教員が中心とはなったが、1回の授業時間内にほぼ全員がコメントを出し合い、保育現場での保育内容の捉えにつながるように進めた。
・授業の前週までに、各回・クラスごとに発表する内容について提出されたものをもとに、プログラムを作成した。プログラムは進行をスムーズにするとともに、イメージをいざなったり、印象づけたりするものとなった。さらに、事前に提出した用紙に授業時に気づいたことと学んだことを記録するようにした。
・同じテーマでの3分野、3つのテーマによる授業を行なったことは、20日間の保育所実習前・後という時期も功を奏して、学生の意欲的な取り組みにつながった。

「今後の課題」

・毎回の授業後には、それぞれが他のグループの発表に刺激を受け、次は今回よりもがんばろう、工夫しようとする声が聞かれた。それは、様々な表現への気づきであろう。それが、授業後の記録に記載されている場合には、なんとか気づきや学びの確認をすることができるが、確実ではない。
・5～6人と限定していた人数は、次第に学生間の人間関係や個性も手伝って、2～8人という人数差を生じた。この授業で一番に養成したいものは、「個が表現する力」であるが、ある程度のまとまった人数をベースにせざるを得ない。学生一人一人の表現力育成をめざした授業方法の工夫が今後の課題である。
・他分野（言葉、環境など）からの表現へのアプローチも常に意識して授業を進めていく必要がある。

① 音楽表現（Bティーム）　（麓）

「ローテーションによる授業について」

・音楽・身体・造形による様々な角度からの表現方法を学生が体験することによって、より広く表現について理解できるものとなる。
・授業回数が3回ずつとなるためポイントを絞っての授業計画が必要である。
・1つのことを掘り下げていく授業にすることは困難である。
・同じ内容で3クラスが行なうことで学生の反応を見ながら内容を修正していくことが可能である。

「テーマを決めて授業を行ったことについて」

・1つのテーマに対して音楽・身体・造形の3つの分野からのアプローチを図ることで、特定の表現にとらわれず状況に応じて最適な方法を選択できるようになる。
・多種多様な表現の組み合わせにより、子どもの創造力をより豊かに伸ばすことができる。

「事務的なことでの課題」

・教室が毎回替わることで学生の中に多少の混乱が生じた。
・次回のための準備に必要な連絡が十分でなかったり曖昧だったりしたことで、学生の様子に予想した効果が得られなかった（手作り楽器）。

「全体としての感想」

・授業回数に対して予定していた内容が多すぎた。→授業内での取捨選択が必要
・手作り楽器・物語表現については、準備時間として各1時間ずつ必要である。
・学生の様子からは、他の表現授業を受けての発想があまり見られなかった。→事前に意識付けしておく必要
・学生のとり組み方は概ね積極的だったように感じたが、受身になることが多く、こちらの提案に対しての応用や発展の形としてはあらわれなかった。→提案（授業）方法の研究が必要

「今後への課題」

・授業へ入る前の計画の段階で十分な検討がなされていなかったことが、今後の課題となった。
・今回の内容では１クラス５通りの授業を行なうことができれば、もう少し内容を掘り下げることができたと思う。
・可能であれば後期も行なうことを検討してほしい。
・各テーマの中で学生たちが音楽・身体・造形による表現をリンクして感じられるような授業作りを模索してはどうかと考える。

② 造形表現　（影山）

「春」

・自由表現であり、いろいろのテーマがあったが、桜の花・タンポポの花に関するものが多かった。表現形式はイラスト的なものが多く、絵画表現は少なかった。
・自分で何を感じたのか具体的に理解できない。（桜の花がきれいだった）これで終わっている。造形的には桜とまわりの関係、木・幹・枝・花の関係、花と花の関係などの理解があって表現となる。
・課題として感性の弱さをどう育てるかという問題であろう。造形だけの問題ではないが…。
・絵を描くにあたって、全クラスで画用紙の表がどれくらい理解できているかアンケートをとった。結果は268名中13名が理解できていた。小・中・高の教育でも基本的なことがらの指導がなされていないまま現在に至ったということであろう。子どもたちに与える自由さと、その自由さが生きてくるような教育が求められよう。

「小動物」

・いろいろなものが出たが、今までに作ったことの再現が多かった。自分の創意工夫のあとが見られるものは１割程度と思われた。授業の終わりに発表会を行ったが創意工夫のある作品は人気が高かった。見る人に感動を与えるものがあるのであろう。
・短時間で作品を生み出すのはむずかしいことであり、創意工夫をする意欲を持って日々努力していくことが大切なことであろう。
・作ることにおいては感性の面と技術的な面との両方が求められる。糸と糸の結び方、紙と糸の接合、のりづけの方法など、子どもが考えるように指導する事柄であろう。

「絵本」

・絵本作りのテーマが決まらず、下書き用の紙の用意も出来ていないなど、準備不足が目立った。
・クラスによる意欲の差が大きく見られた。
・絵本の丸写しはなかったが、小型（A６サイズ）以下のものも多くあった。おおむね小型のものは内容も貧弱な傾向が多くみられた。
・布などの材料を使用したものには工夫のあとが多く見られた。このことは当人の意欲の問題と大きくかかわる。

「全体として」

・学生の感性・意欲をどう育てるか、基本的な技術をどう教えるか、という２つ問題があるように思った。

③ 身体表現　（本山）

「授業方法について」

・以前のように選択方式で実施しているときのような深まりはなかったが、全ての学生に２年生になっても「身体表現」をする機会がもてたことは有意義であったと考える。
・それぞれのテーマにおいて、学生は久々の「身体表現」を楽しんでいたように感じた。

「授業内容について」

・常に子どもを意識して「身体表現」することを促した。具体的には、
「　春　」：「身体表現」を観る・認める（ほめる）こと
「小動物」：教材研究と言葉かけ
「絵　本」：「身体表現」の題材としての絵本の選択と読み聞かせおよび「展開案」の作成と実践まで
とした。ただし、「身についた」というレベルには到達せず、経験できたにとどまる。
・１時間で完結する内容で実施したことは良か

ったと思う。しかし、学生は「やりっぱなし」状態だったと思われ、記録にまとめる作業を取り入れればよかったと考える。
・5月末から6月半ばまで「保育所実習」で授業の間隔があいてしまう時期があり、「絵本」のテーマを実習前に行なったクラスと、実習後に行なったクラスでは、取り組みへの意欲に違いが感じられた。

「今後に向けて」

・全体として、偏りの少ない保育内容「表現」を全学生に提供できたと考える。しかし、学生が授業内容を消化することができたのかどうかは定かではない。
・同じテーマで実施したものを、各学生が振り返る機会を設ける必要性を感じた。つまり、授業ノートなどを作成し、記録することによって整理することを課していきたい。
・実習が間に入る期間の有効な使い方も再検討する必要があるだろう。

以上、各担当者のレポートからは、授業を振り返る視点の異なりを確認することができた。改めて、ティームでの授業運営の難しさと、きめ細やかなコミュニケーションの必要性を感じる結果となった。

④　アンケート結果より

担当者にも学生と同じアンケートへの回答を求めた。

まず、開講時期については4名中3名が「2年生前期でよい」と答えており、残り1名は「いつでもよい」であった。

次に、授業期間については全員が「通年で行ないたい」と回答している。やはり、1クラスに対して3回しか授業ができないことへの「物足りなさ」を全員が感じていることのあらわれであろう。

また、ローテーション方式の授業方法についても全員が「よかった」と答えており、教員のさまざまな専門領域の交わりを好意的に受けとめているといえよう。つまり、共通のテーマを設定したことによる関連性をそれぞれが認めていることになろう。

最後に、「春・小動物・絵本」というテーマについても、全員が「まあよかった」と好意的に受けとめている。3つの領域がそれぞれにアプローチすることができたことのあらわれであろう。

つまり、各担当者にとっても、保育内容「表現」のティーム・ティーチングは初めての経験であった。専任・非常勤の混在ではあったが、今回の試みに対しては、それなりの連携がとれ、ある手ごたえを感じることができたと考えられる。しかし、今回は事前の打ち合わせはほとんど皆無であったことも事実である。この打ち合わせも含めて多くの課題に気づくことができたと考える。次年度に向けて検討したい。

(2)　アンケート結果より

今回の試みに対して、学生の率直な意見を聞くべくアンケートを実施した。その結果を項目別に見ていく。ただし、集計はクラスごとに行ったが、ここでは、AティームとBティームという同じ担当者によるローテーションティームの別で結果を見ていくことにする。また、自由記述を質的な資料として考察に用いた。

①　開講時期

表3　開講時期について

項　目	Aティーム N=126		Bティーム N=130	
	N	(%)	N	(%)
①2年生前期でよい	73	(57.9)	72	(55.4)
②1年生がよい	33	(26.2)	34	(26.2)
③2年生後期がよい	0	(0.0)	4	(3.1)
④いつでもよい	19	(15.1)	20	(15.4)
N.A.	1	(0.8)	0	(0.0)

まず、従前よりこの科目は2年生前期に開講している。その意図するところは1年次において「表現」のベースとなる「基礎技能科目」を履修した上で、保育内容としての「表現」を受講させたいとの考えからである。

そして、この保育内容「表現」の開講時期についてたずねた結果は表3のとおりであった。この表3より、ローテーションティームによる違いは見られず、半数以上（57.9%，55.4%）が「2年生前期でよい」と現状に満足している。そして、「1年間基礎的なことを学んだので、それが生かせる」「1年での勉強を踏まえて学べる」や「1年生では、まだ表現する力が薄いので吸収や討論までできない」あるいは「2年生になると学校生活にも慣れ、とまどいもないので自己を表現しや

すくなっている」などの、広い意味での教員側の意図を汲んだ意見が記載されていた。

一方、両ティームとも26.2%の学生は「1年生がよい」と答えており、自由記述欄には「1年生の頃から「表現」の方法など知りたい」という前向きの意見や、「余裕があるときにやりたかった」「レポートを書いたり、準備をしたりしなければならないので、あまり忙しくない1年生がよい」「レポートが大変」「他の授業の準備も忙しく手がまわらなかった」「就職活動に専念したい」「2年だと就職活動や事前訪問などで出られない時の方が多かったから」などの2年生前期のあわただしさに言及した意見も多く見られた。

さらに、「実習に生かしたい」という思いがあることが、両方の回答を選択した者の自由記述に見られた。「実習などで子どもの姿を見てきているので、表現の授業も比べながら行なうことができた」「実際に実習してみたことや感じたことを、改めて考え直していく機会が得られる」などの意見からは、この授業を保育内容「表現」として捉えていることが読み取れる。そこで、「1年生の幼稚園見学実習の前がよかった」という意見にもなるのであろう。

また、「現場に出るギリギリの時期がよかった」「就職が決まって落ち着いて取り組める時期がよかった」という意見の者は「2年生後期のほうがよい」を選択している。

各教員による授業の捉え方の違いが読み取れるが、全体的に「表現」の授業への前向きの姿勢が窺えた。そして、保育内容「表現」としての捉えも感じられ、2年生前期に実施することに対して手ごたえを感じた。さらに課題としては2年生前期で経験する「保育所実習」をうまく活用した授業展開を検討することであろう。つまり、実習で授業が分断されるとの捉え方ではなく「実習前」「実習」「実習後」と捉え、「子どもと接する機会」として実習を授業の中に取り入れていくことが可能であると思われる。学生は「実習に生かしたい」という視座を、そして、教員は「実習を生かしたい」という視座を組み込むことにより、滑らかな連関が図れるものと考える。

② 授業期間

「半期」という授業期間についてたずねた結果は表4のとおりであった。

表4 授業期間について

項目	Aティーム N=126		Bティーム N=130	
	N	(%)	N	(%)
①半期でよい	68	(54.0)	72	(57.7)
②通年がよい	36	(28.6)	34	(22.3)
③どちらでもよい	22	(17.5)	26	(20.0)

この表4より、ティームによる顕著な違いは見られず、半数以上（54.0%，57.7%）が「半期でよい」と現状に満足している。その理由として、「短期間の間に様々なことを吸収できた」と授業に対する満足を認めている意見、「授業は楽しいけど集中力が続かない」や「ローテーション方式だったからかもしれないけど、準備など大変だったから」など、自分の限界を感じている意見、さらには「表現も大切だが、他のこともたくさん学びたい」などの率直な意見が見られた。

一方Aティームで28.6%，Bティームで22.3%学生が「通年がよい」と回答している。担当教員の全員が「通年がよい」と思っているほど学生は思っていないが、可能ならば選択科目として機会を提供できることが望ましいと思われる。なぜなら、「通年でもっと深く学びたかった」「もっと音楽・造形・身体表現、それぞれにじっくり取り組みたいと思った」「通年のほうが何回もいろいろな先生の授業を受けることができるので」「内容が濃かったので3回ずつでは物足りない」などの非常に意欲的な意見が見られたからである。

また、「実習で授業ができない期間もあったので、その期間分もできたらよいと思った」という意見も見られた。実際、この調査後に「補講」という形で穴埋めはしたが、やはり、本来の授業ではなく、補助的な内容としての機能にとどまったということであろう。

③ 授業方法（ローテーション方式）

共通のテーマのもと、3人の教員の専門領域からのアプローチをローテーション方式で受講するという授業方法についての結果は表5に示したとおりである。

表5　授業方法について

項　目	Aティーム N=126		Bティーム N=130	
	N	(%)	N	(%)
①よかった	33	(26.2)	3	(23.8)
②まあよかった	43	(34.1)	5	(39.2)
③どちらでもない	24	(19.0)	19	(14.6)
④あまりよくない	23	(18.3)	26	(20.0)
⑤よくなかった	3	(2.4)	3	(2.3)

この表5より、授業方法についてもティームによる違いは見られなかった。「よかった」「まあよかった」と満足を示した結果が両ティームとも6割を超えている（60.3%，63.0%）。

自由記述より「よくなかった」理由を見てみると、まず、「ローテーションより、連続して3時間やってくれた方がよかった」という意見が多く見られた。これは、授業の中で共通のテーマでの連続性を感じていないこと、さらには、授業の中で総合的に「表現」を捉えることができていないことのあらわれだと読み取れる。ここのところが今後の大いなる課題であろう。その一方で、「ひとつの分野にかたよらず、いろんな視点で見ることができた」や「3分野、3人が違う。でも、つながっていることが実感できたと思う」と、こちらのねらいを感じ取ってくれた意見があったことは今後の励みになる。

それ以外では、「落ち着かなかった」「少し忙しい感じがした」「宿題や前の時間に何をやったか忘れてしまう」「次は何なのかを迷ってしまうし、持ち物とか忘れてしまうので」「毎週、授業の教室が違うとまぎらわしい」などの意見が見られた。これらは学生の努力と、担当者側の配慮で改善できると考える。特に、担当者が、自分の担当だけではなく、授業全体の流れを把握していることが、学生の授業の捉え方にも大きく影響するということを反省することができた。具体的には、担当者が「前の時間」と言うとき、「自分の前の時間」であってはならないし、つまりは、「他の担当者が行った前の時間」の続きをするという意識が各担当者に求められるのであろう。

また、わずかではあるが「選択性がいい」という意見もあった。

④　授業内容（春・小動物・絵本というテーマ）

毎回、共通のテーマの下授業を展開していったが、そのテーマについてたずねた結果は表6のとおりである。

表6　授業内容について

項　目	Aティーム N=126		Bティーム N=130	
	N	(%)	N	(%)
①適切	41	(32.5)	39	(30.0)
②まあ適切	60	(47.6)	68	(52.3)
③どちらでもない	24	(19.0)	18	(13.8)
④どちらかというと不適切	1	(0.8)	2	(1.5)
⑤不適切	0	(0.0)	1	(0.8)
N.A.	0	(0.0)	2	(1.5)

この表6より、両ティーム共に8割以上（80.1%，82.3%）の学生が「適切」「まあ適切」と回答しており、テーマについては好意的に受けとめていることがわかる。

具体的に自由記述を見てみると、自分が表現する観点から「イメージがたくさんふくらんだ」し、「どれも表現しやすいテーマだったと思う」とし、また「身近にあるものなので、テーマとしてはよい」という意見が見られた。さらに、保育という観点からも「保育の中でも季節は大切にするので、よいテーマだと思う」「保育現場で使えそうだと思った」「子どもたちが好きそうなものばかり」であったと評価している。しかし、3つのテーマ中では「絵本というテーマは難しかった」と感じた意見も多く見られた。それ以外としては、「また違うものにも挑戦してみたい」と意欲的な意見や、さらには「テーマはもっと数があって、その中から好きなものを選んでもよいと思った」「自分でテーマをきめるという方法でもよかった」などテーマ設定方法にも言及していた。そして、「いろいろなテーマがあって勉強になった」し、「テーマについては考えが深まった」とテーマ設定による学習方法についても評価する意見が記述されていた。

⑤　各担当者の授業について

各担当者の授業についても5段階で評価するよう求めた。今回は結果を示した表7からと自由記述から授業内容に関する意見を抽出し検討したいと考える。なお、授業方法についてはここでは取り上げず、各担当者の検討事項とする。

a．音楽表現

まず、音楽表現についてであるが、この表現のみティームによって担当者が異なっていた。

表7　音楽表現の授業について

項　目	Aティーム N=126		Bティーム N=130	
	N	(%)	N	(%)
①よかった	82	(65.1)	58	(44.6)
②まあよかった	40	(31.7)	51	(39.2)
③どちらでもない	3	(2.4)	18	(13.8)
④あまりよくない	1	(0.8)	2	(1.5)
⑤よくなかった	0	(0.0)	0	(0.0)
N.A.	0	(0.0)	1	(0.8)

表7より、Aティームでは96.8%もの学生が、Bティームにおいても83.8%の学生が「よかった」「まあよかった」と肯定的に評価している。

その評価の内容を授業内容に関する自由記述から拾ってみる。まずAティームでは「音楽表現や楽器の使い方、指導などたくさん身についた」「音楽の表現だが動きをつけて楽しめるように工夫することも学ぶことができた」「音楽で表現することのおもしろさを知ることができてよかった」など、自分自身が音楽表現の工夫を通して学んだことについての意見が多くあった。また、その学びは「いろいろな人の発表がとても役立った」「先生の一言がとても勉強になった」との意見からもわかり、この授業の中で「楽しい時間をすごすことができた」し、「グループのメンバーと協力するということがとてもよかった」と受けとめていることがわかる。さらには、「子どもに向けての表現を勉強できたのでよかった」「音楽は歌うだけでなく、歌う中で子どもを歌の中に引き込むことが重要だと思う」「保育者として自分はどう捉えたらいいのか、よくわかった」など、子どもの「表現」に関しての気づきも多く見られたことは注目に値する。

次にBティームの自由記述について見てみる。「知らなかった楽器を使えたので楽しかった」「楽器を作って楽しめた」「楽器を使った楽しい内容で、子どもたちも喜びそうな内容だった」に代表されるように大半が「楽器」に関する楽しさが記述されていた。それ以外では「知らない手遊びやリズム遊びができて楽しかった」「色々なゲームをして楽しかった」「いろいろな音を聞くことができた」などであった。

b．造形表現の授業について

造形表現の授業についての結果は表8のとおりである。この表8より、肯定的な評価（「よかった」「まあよかった」）・「どちらでもない」・否定的な評価（「あまりよくなかった」「よくなかった」）の3段階で見てみると、両ティームとも、「肯定的」「否定的」「どちらでもない」の順（Aティーム：41.2%，21.4%，35.7%・Bティーム：36.2%，31.5%，31.6%）になっている。そして、特にBティームにおいてはその差がほとんどないことがわかる。

表8　造形表現の授業について

項　目	Aティーム N=126		Bティーム N=130	
	N	(%)	N	(%)
①よかった	12	(9.5)	13	(10.0)
②まあよかった	40	(31.7)	34	(26.2)
③どちらでもない	27	(21.4)	41	(31.5)
④あまりよくない	33	(26.2)	27	(20.8)
⑤よくなかった	12	(9.5)	14	(10.8)
N.A.	2	(1.6)	1	(0.8)

自由記述から授業内容に関する意見を拾ってみる。「絵本を作ったり絵を描いたりして楽しかった」「みんなのいろいろなアイデアが見られて参考になった」や「動くおもちゃや絵本づくりはよい経験になった」「“素材”について知った。形に表現することの難しさと楽しさを知った」に代表される授業内容の楽しさを記述したものが多くあった。中でも「子どもたちに行なうことができるように考えながら造形をしたのはよかった」「子どもを主体とした表現だったのでよかったと思う」と、保育内容としての授業内容を評価する記述も見られ、「絵や工作は苦手だけれど、子どもと関わる中であんなことができたらいいと思う」「作ることは苦手だけど必要なことだから大切だと思った」などは、保育者の立場に立った記述であることがわかる。そして「保育実習で役立つことがあった」「授業時間内に手早く作るということを経験していたことが、テーマを与えられてすぐに作るという就職試験の課題に役立った」と振り返っている。さらには、「造形表現でも何かをつくるといっても、自分のイメージ・工夫をしていくことが大切だということに気づき、考える機会があった」という記述はローテーション方式によってもたらされたものと窺うことができる。

c．身体表現の授業について

表9より身体表現の授業については両ティーム共に9割以上（92.9%．93.1%）の学生が「よかった」「まあよかった」と肯定的に捉えている。

表9　身体表現の授業について

項　目	Aティーム N=126		Bティーム N=130	
	N	(%)	N	(%)
①よかった	83	(65.9)	82	(63.1)
②まあよかった	34	(27.0)	39	(30.0)
③どちらでもない	6	(4.8)	7	(5.4)
④あまりよくない	2	(1.6)	1	(0.8)
⑤よくなかった	0	(0.0)	0	(0.0)
N.A.	1	(0.8)	1	(0.8)

具体的には、1年次に経験した「パフォーミングボディ[4]の時に勉強したことを思い出しながらすることができた」ことにより、「前よりみんなで話し合って決める力がついた」と自分の成長が確認できた記述がされていた。そして、「事例も取り入れて話してくれるので楽しかった」「表現する楽しみ、見る楽しみを味わえ、どんな表現も認めてくれ、体一杯使うことの楽しさを知ることができた」に代表されるように「楽しかった」ことを示す記述が多く、その楽しさを通じて「思ったこと、いろいろな物などを体で表現することは大切だと感じることができた」「子どもたちは何気ないものも自分たちで表現していくので、それをもっと広げていくのに大切な部分だと思った」など「身体表現」の特性への気づきに至っている。また、「身体表現があるからこそ、様々な表現ができるようになったし、子どものそのままの表現を受けとめ、子どもが行っていることが理解できるようになった」「子どもの視点に立って考えることで、いろいろと振り返ることができた」「子どもの身体表現を理解するには、保育者が表現について理解することが大切だと思った」などの記述は、子どもの「身体表現」を理解する観点から書かれていることが興味深い。また、「保育者が楽しむことの大切さや、身体表現の進め方、発展のさせ方など、とても勉強になった」「将来、保育者となった時の言葉がけの仕方も学べてよかった」が、「導入の仕方をもっと学びたかった」「どんな絵本なら表現しやすいのか伝わりやすいのかということを考えなくてはいけないが、保育現場でも取り入れていきたいと思った」と保育現場での実践を意識した記述も多く見られた。「指導者という立場で身体表現することの難しさがわかり、身体表現について「頭と体で学ぶことができた」様子が記述から読み取れる。

④　全体の考察

以上、アンケートの結果を振り返ると、学生の熱心な受講態度が印象的であった。そして、「楽しかった」という記述が多く見られ、「感じたことや考えたことを自分なりに表現すること」を楽しんだ様子が明らかになった。それは3種類の「テーマ」が好意的に受けとめられていたことや、今回試みたローテーション方式による授業方法も、再検討すべき点は明らかになったものの、それなりに支持されたことに起因しているのだろう。

しかし、そこからの学びの深まりは、学生による違いがあることも明らかになった。つまり、自分自身が楽しむことで完結している学生、そこから子どもへ思いを馳せている学生、あるいは保育者としての自分の姿を思い描いている学生、まさに「保育内容」として捉えることができたかどうかと言い換えることもできるであろう。そして、学生にとっては「忙しかった」が、一定程度保育を勉強した2年生という時期に実施したからこそ、学生の意識を「子ども」や「保育者」に向かわせることができたと考える。また、今回のアンケートでは明らかにならなかったが、表に示した2つの課題も保育内容としての視点を明確にする上において、有効であったと考える。

今後、保育内容「表現」として授業を捉え、学生の意識をさらに刺激するためには、表現の「楽しさ」をベースにしつつ、授業の期間に実施される「保育所実習」をうまく活用していくことが望まれる。さらには、まさに「先生たちの間でも、どんな授業をするのか話し合ってほしい」というひとつの記述が示しているように、まずは担当者が分断することなく、融合して授業に取り組むことが求められていると感じた。今回のアンケートにより、そのための資料が得られたと考える。また、「通年で行ないたい」という学生の存在も視野に入れつつ、そのような希望をかなえる努力もしていきたいと考える。　（本山）

4　まとめ

今年度の保育内容「表現」の授業方法と授業内容

をもとに、「保育内容「表現」」の授業のあり方を求めて、表現する者の養成に必要なものが何かを探ってきた。

現状の体制の中、教員がどのように工夫し、どのような意識で授業に向かうのかということが確認されたことには大きな意味を見出すことができる。保育内容「表現」を担当する教員は、計画、連携、実践後の反省を怠ることなく、常に考え工夫する態度が必要なのである。これは、言うまでもなく保育者にとって欠くことのできない基本的な態度でもある。今後も更なる学生の意欲や保育への期待につながっていくような授業への取り組みに力を注がなければならない。

ローテーション方式で、必ず多領域の教員と出会い、さまざまな表現への感覚や感性にふれることは、学生の保育内容「表現」の捉えに少なからず影響を及ぼしたことは、アンケート結果からも明らかである。あくまでも保育内容の領域はひとつの「窓」あるいは「切り口」であることを認識して、遊びや活動、生活全体を捉える視点は持ち続けたいものである。そして、学生が他の教科とリンクして、あるいは関連教科の積み重ねであることを意識して、「実習」「実践」に臨むことを願ってやまない。

本研究報告では、感じたことや考えたことをありのままに表現し、子どもたちと表現し合う視点を持ち合わせた学生の育ちを願って、保育内容「表現」の授業方法や授業内容について、検討を進めてきた。授業中に、「私は表現が嫌いです。」とはっきり意思表示する学生がいた。言われた瞬間、その言葉が強く心に残り、ありのままを表現している姿を受けとめながらも指導をしていくことの難しさと同時に、ふしぎなほど安心感にも似た感情をおぼえた。表現というものへの固定概念があったのだろう。最後の授業後には「だんだん楽しくなってきた」との感想を述べていた。その後、その学生の表情がやわらかくなったと感じる。思い、感じたままを表現しながら、周りの状況を受け入れ、変わっていく自分に気づいていくことが、保育内容「表現」の先にあるものに導いてくれる予感がする。　　（大岩）

【注】

(1) 「幼稚園教育要領」　文部省　1998年　p.10
(2) 黒川建一編「保育内容「表現」」　ミネルヴァ書房　2004年　p.163～p.215
(3) 鳥居恵治他「保育者養成カリキュラムにおける表現活動の総合化（その２）」
岡崎女子短期大学研究紀要第23号　p.107
(4) パフォーミングボディとは、体をつかった身体表現と体の中から発する声の表現の２領域を学ぶ授業科目の名称である。ともに体を開放することによって、保育者として豊かな表現につなげていくことを目標としている。

【参考文献】

大場牧夫著
「表現原論」　萌文書林　1996年
森上史朗＋大豆生田啓友＋渡辺秀則編
「保育内容総論」　ミネルヴァ書房　2001年
西　洋子、本山益子、鈴木裕子、吉川京子共著
「子ども・からだ・表現」　市村出版　2003年
黒川建一編
「保育内容「表現」」　ミネルヴァ書房　2004年